

美術の資質・能力を育む授業の工夫

古屋 美那実

1. 美術科研究主題について

(1) これまでの本校美術科の研究

平成 29 年度から平成 31 年度の 3 か年は、『新たな世界を主体的に創造する生徒の育成～「見方・考え方」を働かせた学びを通して～』という全体研究主題の基、「美術の資質・能力を育む授業の工夫」を研究主題とし、造形的な見方・考え方を働かせた学びに着目した題材構成や授業の手立ての検討、実践を行うとともに、それらを通して育まれた資質・能力を見取ることについて研究を行った。研究においては、授業構成とワークシートの 2 点を工夫することにより、生徒自身の学習調整を促してきた。

平成 31 年度から令和 3 年度の 3 か年は、全体研究において『創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成～「主体的な学び」のプロセスモデル実現を目指して～』という主題の基、未来を切り拓く生徒に必要と考えられる「自ら問い続ける力」と「創造性」に着目し、「主体的な学び」のプロセスモデルやその評価について研究を行った。

(2) 生徒の実態

生徒たちは、情報通信技術の発達により豊かな視覚情報のなかで生活している。インターネットを利用し検索することで簡単に情報が入手できる一方で、自分独自のものを生み出すことが難しくなっている。また、多様な情報が発信されているにもかかわらず、画一的な価値観が主流となっていたり、特定の価値観を絶対的なものと受け止め、捉えなおす機会そのものが失われてしまったりしている様子も見受けられる。

生活面においては、失敗することを恐れたり、また自分で試すことなく正解を求めたりする姿がたびたび見られる。失敗を恐れることで、失敗して学ぶという経験が少なかったり、最短で正解することに重きを置くことで試行錯誤する経験が限られていたりすることが考えられる。

学習活動においては、概して意欲が高く主体的に取り組もうとする。美術科の学習においても、課題の内容や取り組み方がわかると積極的に取り組む。表現の学習では、自ら感じ取ったことや思ったこと等を基に描いたりつくったりする。また、見る人や使う人の立場に立ってデザインや工芸等に表現したりする。鑑賞では、自由に考えを述べる雰囲気をつくることで、作品から豊かに感じ取り、自分が感じたことを言葉にし、友達と意見を交換することができる。一方で、美術の授業を通して身に付けたい力や目指すところ等を理解し、取り組んでいる生徒は少ないように感じている。そのため、学んだことを日常生活で生かす経験も限られているようである。

このような生徒に対して、よりよいものをめざして試行錯誤を続ける態度を育てるとともに、造形的な視点を持ち、生活や社会の中で美術、美術文化等と豊かに関わる資質・能力をさらに伸ばしていきたい。

(3) 全体研究主題より

美術科で育成する「創造性」について

全体研究において「創造性」は、『自ら課題を見出し、これまでに学んだことや新たな知、技術革新を結び付けることで解決して、新たな価値を創り出すための資質・能力』だと述べている。

全体研究において示された「創造性」を美術科において考えると、次のようになる。課題を見出すこととは「作品を通して何を表したいか」という主題をつくり出すことである。美術科における主題とは、価値や心情等に関わるものといえ、生徒自身が自らの経験等をもとに対象や事象等に向き合い、問いかけることで生み出すことができるものである。そして、課題を解決することとは、美術科においては主題を表すということである。そのために、生徒自身がそれまで経験したことや学んだことを生かし、形や色、描き方等を考え、感じたことから工夫をこらす等しなければならない。つまり「私の主題をどのように表現するか」という生徒一人一人が、それぞれの問いを持ち、それに向かって一人一人が独自の解決の仕方をつくり出すことである。その結果、生徒が得られるものは、自分にとっての新たな意味や価値であり、唯一のものである。

以上を踏まえ、美術科では「創造性」を、自らの経験等をもとに対象や事象に向き合い、作品を通して「何を表したいか」を問いかけることで主題を生み出し、主題を「どのように表現するか」を形や色、描き方等を考え解決する中で生まれる、新たな意味や価値をつくり出すための資質・能力と考える。

(4) 1年次の研究主題

(3)の全体研究主題に述べた、美術科における「創造性」の考え方を基に、題材を通して創造性が育成されていく過程を以下のように整理した。

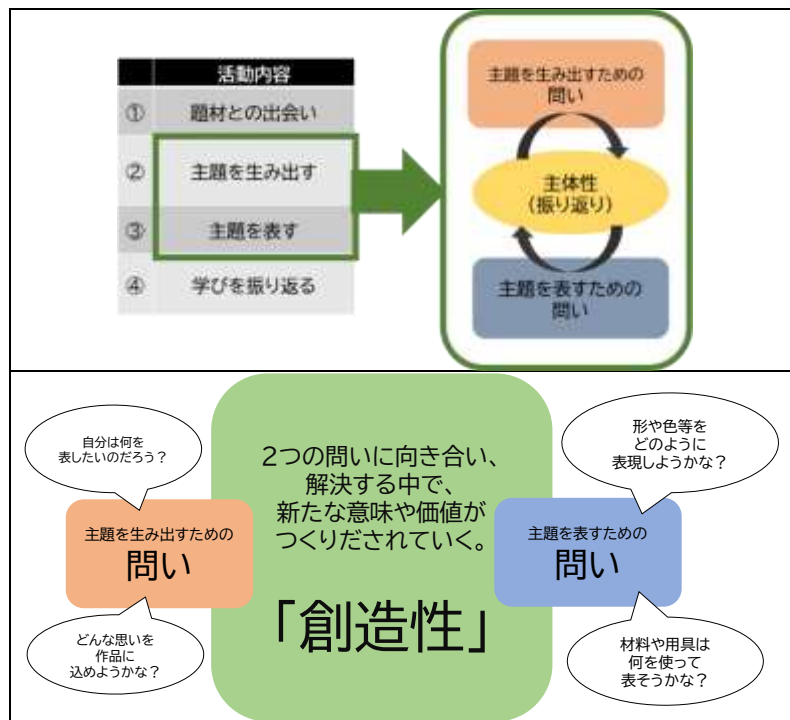
以上を踏まえ、「創造性」を育成していくためには2つの要素が必要だと考えた。

1つ目は「主題を生み出すための問い」である。「主題を生み出すための問い」とは、自分が題材を通して「何を表したいのか、何をつくりたいのか、どういう思いで表現しているのか」等、強く表したいこと心の中で描くことであり、自分の思いや願いに迫る問いである。自分の表したいことを見つけ、主題を生み出していくためには、自らがやってみたい、挑戦してみたいという動機づけが必要となり、主体的に学びにつながる題材や発問の工夫が重要となると考えた。そこで生徒が主題を生み出し表すにあたって生徒に働きかける発問を構造化し、整理した。

2つ目に「主題を表すための問い」である。自分の主題に対して、形や色、描き方等、発想や構想したことをどのように表現するかを考えることを意味する。

表現の意図に応じて様々な技能を応用したり、工夫を繰り返したりして自分の表現方法を見出していくために重要な「問い」となる。自らが工夫して表現してみたいと思える動機づけに繋げるために、発想や構想を深めるワークシート（ICT）や生徒間の対話の場、発問の工夫が重要となると考え、授業の中でそれらを意識した実践を試みた。

加えて、2つの「問い」を基に主題と生み出し表現していく中で、自らの問題の解決に向けて試行錯誤していくためには、主体的に学ぶ姿勢が重要となる。そこで、振り返りの工夫が重要と考えた。全体研究にもある「主体的な学び」のプロセスモデルを「振り返り」の学習過程を重点に置き、学びを振り返り課題解決に向かって自らの学びを調整できるよう指導・支援を行った。



2. 研究の目的

生徒が「問い」から新たな意味や価値をつくりだす中で、主題を生み出し表現していくための美術の資質・能力を育む授業の工夫について明らかにする

3. 研究の内容

① 「主題」を生み出し、表現していくための手立ての検討

- ・「主題を生み出すための問い」…自らがやってみたい、挑戦してみたいという動機づけに繋がる題材や発問の工夫
- ・「主題を表すための問い」…自らが表現してみたいと思える動機づけに繋がる発想や構想を深めるワークシート（ICT）や生徒間の対話の場、発問の工夫

② 自ら学びを調整しようとする態度を見取る手段の検討

- ・「振り返り」の指導をする中で、プロセスモデルを生かして生徒自身に自らの学びをモニターさせ、自己評価と他己評価を生かして学びを進めさせる。

4. 3か年の研究の見通し

1年目である令和4年度は、「創造性を働かせた学び」に育成させていくために「主題を生み出すための問い」と「主題を表すための問い」を視点に置いて整理をしながら授業の開発を行い、創造性が育成されていくための有効な手立てを検討した。

2年目である令和5年度は、1年目の研究結果を基に検討し、授業改善を行い、発問の構造に注目して主体性を持ち問いを深めていくための工夫について検討していく。

3年目である令和6年度は、1、2年次の実践を基に、学びの評価方法について検討していく。

5. 1年次の成果と課題

成果

- ・授業全体について、主題を中心にして発問を設定しワークシートを作成したことによって、授業の構造を明確化させることができた。
- ・振り返りシートについては今回必要な場面でのみ記入するように実施したが、言葉の記入だけでなく、写真等を使って記録させることで、学びの過程が明確化させることができた。
- ・題材内容について、ロゴという生徒にとって身近なテーマを取り上げ、自分でどのようなお店のロゴを考えるか等といった自己決定をする場面があったことで生徒のモチベーションを高めることに繋がられた。
- ・多種多様なロゴが生み出されることによって、他の生徒の作品との上手い・下手の差が生じにくかったことで絵を描くことが苦手な生徒にとっても有能さを感じる事ができた。

課題

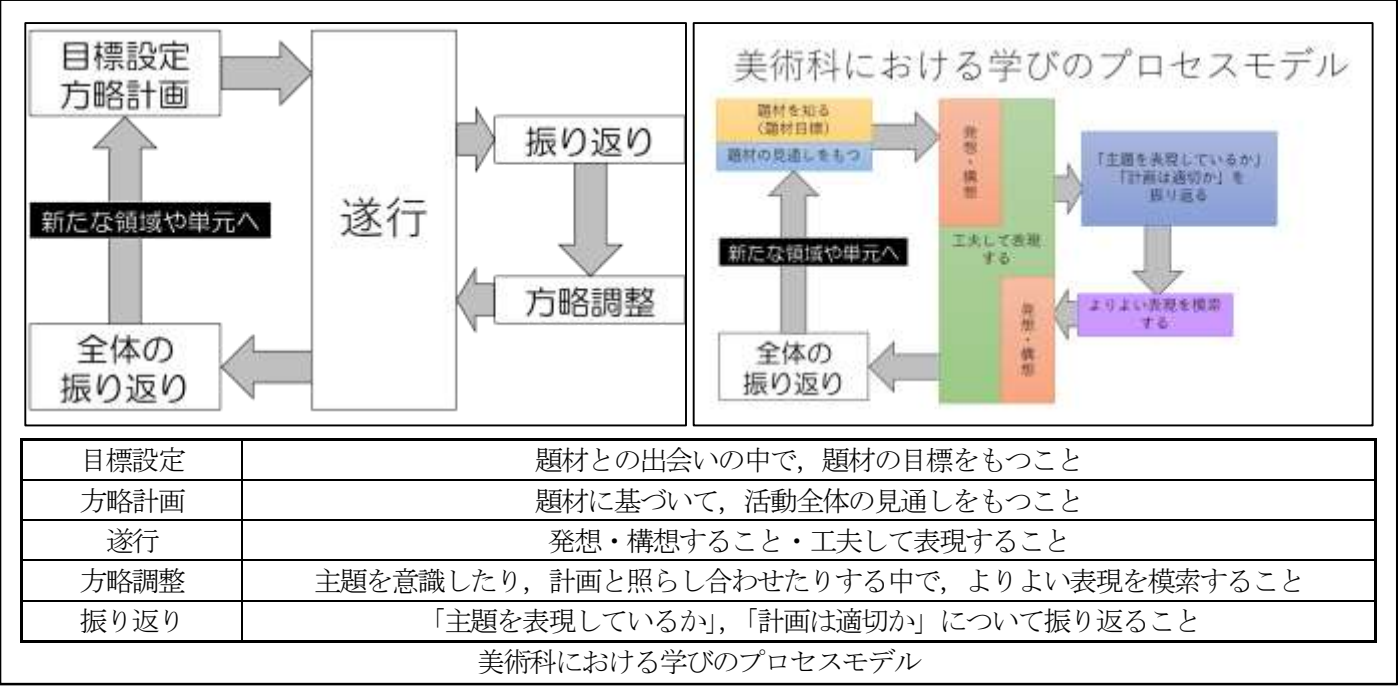
- ・最終的な作品提示の仕方について、もっと「やってみたい」「やりたい」という強い意欲へ結びつけることができればよりよかったのではないかな。そのため、マップはロゴをもっと目立たせられるような形式にすることも一つの手段として考えられる。
- ・今回発問の整理し構造化を図っていきみたが、補助的な問いかけの部分が整理しきれていない部分があった。
- ・本授業において、活動に意欲が持てない、活動に取り組むことができない生徒にスポットが当てられていない。主体的な学びを引き出すための支援を考えていくときには、絵が苦手な子でも活躍できる場があるなど、Cの生徒に対してどのような働きかけを行っていくかを検討する必要がある。
- ・振り返りの際に学習方略の獲得。やりかたを学習することが大切。授業全体でどのような表現の仕方があるなど学習の仕方などを知ることも大切。

6. 2年次の研究主題

2年次では、全体研究と1年次の成果と課題を踏まえ、『「主体的な学び」のプロセスモデルを意識させた学びを実現するための手立て』，「新たな意味や考え方を見出す思考力，判断力，表現力を育成する手立て」の2つに視点を当て，創造性を育てていくための授業の在り方について検討していく。

(1)「主体的な学び」のプロセスモデルを意識した学びを実現するための手立て

まず、美術科において「主体的な学び」のプロセスモデルを以下のように整理している。



上記を踏まえ、生徒が「学習方略」を獲得していくための手立てについて考えた。全体総論にも述べられている通り、「学習方略」とは生徒たちが主体的に「見方・考え方」を働かせたり、「考えるための技法」を活用したりして学ぶことができるようにするための「学び方」であるとまとめている。それを踏まえ、生徒が主体的に学習に取り組んでいくためには、生徒がプロセスモデルを実行していく中で、指導者が「考えるための技法」を一時的に与えるのではなく、生徒自身が必要性を感じて活動に応じて活用できるようになることによって、より活動に対してやりがいを感じられるとともに、生徒の資質・能力の向上につながることを考える。そのため、生徒が自分事として主体的に活動に取り組んでいくために、「学習方略」を生徒自身で活動の中で必要性を感じて選び取らせていくことを3年間の中でできるようにしていきたい。そうすることによって、生徒自らが学びを調整することができるようになることを考える。そこで、まず美術科における「学習方略」の概要について、以下のようにまとめた。

〔美術科における「学習方略」の概要〕

- ㉑物事について造形的な視点で捉える。
- ㉒他者の意見を聞き、検討し、必要に応じて取り入れる。
- ㉓自身の感じ方や考え方を確認する。
- ㉔表したいものと表したものを確認し、再検討する。
- ㉕活動の見通しをもつ。

題材の分野の特質や活動内容に応じて、ワークシートや指導者の働きかけ等を通して身に付けられるようにしていく必要がある。

上記を踏まえ、“生徒”が「学習方略」を獲得していくための手立てを整理した。まず、生徒が「学習方略」を獲得していくためには、「主体的な学び」に向かうような題材を設定する必要がある。生徒の学ぶ意欲を維持させるような題材を設定していくために、題材の設定する中で考えるべき視点について以下のようにまとめた。

〔題材について〕

生徒にとって魅力的な題材を扱うことで自ら主題を生み出すことのできる活動を設定する。

- **関係性**…生徒にとって身近な内容であること
- **難易度**…生徒にとって目標を実現する可能性が感じられること（テーマ・材料・用具）
- **必然性**…生徒にとって考える価値があること
- **多様性**…考えや表現の多様性があること

題材は、学年や生徒の実態、学ぶ環境によって実行できる内容は大きく変動するが、上記に述べた視点を領域に応じて考えることによって、生徒の主体的な学びを維持することにつながるのではないかと考えた。

次に、学びを深めるための〔授業の手立て〕について整理した。これは結果的に生徒の「学習方略」となり、生徒が活動の価値を感じ、必要に応じて選択できるようにしていきたい。また、上記で述べた美術科における「学習方略」の概要と照らし合わせて、育成につながる手立てを当てはめた。

〔授業の手立てについて〕 → 「学習方略」となるもの

- ① 参考作品を分析する。（教員が制作したもの、過去の生徒作品、画家の作品等）㉑㉓
- ② 思考ツールを活用する。㉓
- ③ アイデアスケッチを分析し、情報収集する。㉑㉒
- ④ 作品を見て、振り返る。㉒㉔
- ⑤ 振り返りシートを通して自己の活動を振り返る。㉓㉕
- ⑥ 既習の学習事項を振り返る。㉑

※研究授業において、取り入れた手立てを指導案にて参照している。

また、一人でも多くの生徒が主体的な学びをできるようにしていくために、〔授業中の生徒への働きかけ〕について整理した。これは、特にCの生徒に焦点を当てて働きかけることとなる。

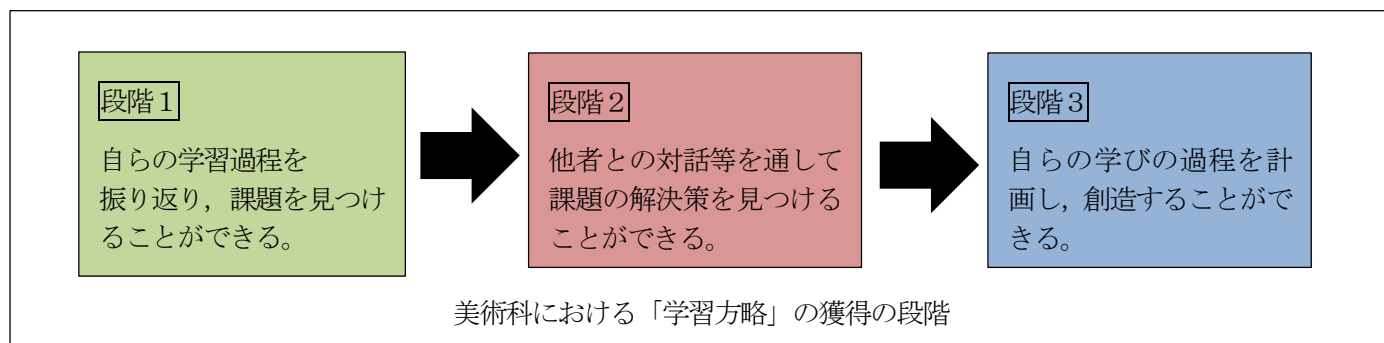
〔授業中の生徒への働きかけについて〕 ※主にCの生徒へ働きかけること

- ① 題材を生徒の身近なものへと落とし込む問いかけを行う。
- ② 発想を広げる手立てを示す。（ウェブマップを書かせる、人の考えに触れる）
- ③ 構想を具体化させる声かけを行う。（選択肢を与える、比較する、人の作品を見る、ツールを替える等）
- ④ 主題を確認させる問いかけを行う。

上記の内容をプロセスモデルに当てはめ（指導案にて参照）、「主体的な学び」を実践していくことで、「学習方略」の

獲得を目指していきたい。

最後に、上記の手立てや働きかけを実践していく中で、生徒の「学習方略」の獲得の段階を以下のようにまとめた。



3年間の題材の中で、それぞれの生徒の獲得の段階に応じて、授業の中での働きかけを工夫していく。

(2) 美術科における新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力を育成する手立て

美術科の学習指導要領では思考力、判断力、表現力等の目標について以下のように説明されている。

造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。

美術科において育成する「思考力、判断力、表現力等」とは、表現の活動を通して育成する発想や構想に関する資質・能力と、鑑賞の活動を通して育成する鑑賞に関する資質・能力の二つから構成されている。

「思考力、判断力、表現力等」をより豊かに育成するためには、発想や構想と鑑賞に関する資質・能力を総合的に働かせて学習が進められるようにすることが大切である。発想や構想に関する資質・能力や鑑賞に関する資質・能力を育成する観点から、題材の活動において造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどの学習の中心になる考えを明確にすることにより、鑑賞したことが発想し構想を練るときに生かされ、また発想や構想をしたことが鑑賞において見方や感じ方に関する学習に生かされるようになることが大切である。それぞれの資質・能力が相互に関連して働くようにすることを積み重ねることが、より豊かで創造的な「思考力、判断力、表現力等」の育成につながると考えられる。

上記を前提として、本研究においては問いを生み出す「主題」に重点を置いている。(1)で述べたように「主題を生み出す」とは、生徒自らが感じ取ったことや考えたこと、目的や条件などを基に「自分は何を表したいのか、何をつくりたいのか、どういう思いで表現しようとしているのか」など、強く表したいことを心の中に思い描くことであり、独創的で個性豊かな発想や構想をする際に基盤になるものである。

以上を通して、本研究においては思考力、判断力、表現力等を「自らが題材を通して主題を生み出し・表し・読み取るにあたって向き合う、問いを解決する中で培われる能力」と整理する。上記を踏まえ、思考力、判断力、表現力等を育成するための手立てとして以下のように整理した。

発想力・構想力に関して

発想力…生徒自身が主題を生み出していくための、動機づけに繋がる題材や発問の工夫

構想力…生徒自身が主題を表していくための、工夫して表現してみたいという動機づけに繋がる構想を深めるワークシート (ICT) や画材、生徒間の対話の工夫

鑑賞の能力に関して

主題を見取っていくための、形や色等の表現と特徴に注目させるワークシートの工夫と鑑賞資料の選定

2年次の研究においては、上記の内容の中でも昨年度から継続してきた発問の構成を継続して作成し、考えを深める発問について分析を進めていく。また、鑑賞の能力に関しては、導入におけるワークシートと鑑賞資料について検討していく。また、「新たな意味や考え方を見出す思考力・判断力・表現力等」を見取るための評価についても検討していく。

7. 参考文献

国立教育政策研究所 教育課程研究センター (2020) 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 (中学校美術) 』

文部科学省 (2017) 「中学校学習指導要領解説 総則編」

文部科学省 (2017) 「中学校学習指導要領解説 美術編」

山梨大学教育学部附属中学校 (2021) 「令和3年度 研究紀要」

山梨大学教育学部附属中学校 (2022) 「令和4年度 研究紀要」

木村明憲 (2023) 『自己調整学習 主体的な学習者を育てる方法と実践』 明治図書出版社